

私の住宅遍歴 30 軒から

これまでに私が移り住んだ家の数は 30 に及ぶ。「引越し魔か」と冷やかされることもあるが、この体験は私の人生を豊かにし、住宅関連の仕事をする上で貴重な資源ともなった、それらの中から多少なりとも本誌に関係があり、資源・エネルギーにまつわる思い出話をいくつかご紹介したい。

お湯が使える住宅

昭和 20 年代の住まいで蛇口からお湯が出るというのはびっくりするような贅沢だった。小さな製鉄所を預かっていた父が自分と家族のために作らせた工場長社宅では、台所、洗面所、浴室にお湯が出ていた。溶鉱炉の廃熱を利用して 200 m先の自宅まで給湯配管を引かせたのである。湯が熱くなるまでにはずいぶん水を捨てなければならないが、いくら使ってもタダだから気楽なもの。熱い湯が出始めれば温泉と同じだ。

冬の朝、小学校の教室で担任の先生が「今朝お湯で顔を洗った人は？」と皆に問い掛ける。恐る恐る手を上げると、「ハマ君は仕方がない」と勘弁してもらった記憶がある。湯で顔を洗うのが軟弱なことと見られる時代だった。それにしても先生は児童の家の状況を把握していたらしい。

蛇口は真鍮製、浴槽はヒノキの厚板で作られた箱型。水漏れを防ぐ詰め物に檜皮が使われ、コーナー部分は銅版で補強されていた。シャワーはなく、上がり湯のための小さな湯槽は、洗面台や台所流しと同じく人研(じんとぎ)だった。

当時はちゃぶ台での食事が普通だったが、わが家にはテーブル・椅子式の「食堂」があり、台所とはハッチ付きのカウンターで結ばれていた。パーゴラが掛かったテラスやサンルームなど珍しい名前の場所もあり、公共水道もガスもない宮崎県の田舎町にしては不釣り合いな「モダンリビング」であった。建築家の伯父が設計してくれた懐かしい家である。

フランスのアパルトマン

昭和 40 年代、留学のためフランス東部のストラスブールに新妻と 2 年間暮らした。共同住宅の共用階段や廊下などには自然採光のない場合が多い。照明は必要なときだけスイッチを押して点灯させ、数分後には自動的に消える。最初それを知らなかったので、突然真っ暗になってびっくりした。スイッチはドアの近いところにネオンランプで表示されるから、消えたら押し直せば良い。実に単純で省エネ効果のある共用照明システムだった。夜どおし煌々と灯される我が国の共同住宅群を見ると、エネルギー浪費に対する無頓着さを感じざるを得ない。

暖房は温水又はスチームの熱を窓際のラジエーターで放熱させる。秋から春まで半年以上暖房が絶えることはない。快適そのものだったが、今思えばシングルガラスの窓から熱がどんどん逃げていたのだろう。暖房・給湯費用は家賃に含まれていたもので気にもしていなかった。一方、家賃に暖房費が含まれることは、家主が建築の断熱を改善するインセンティブになることを意味し、これからの賃貸住宅の断熱性向上のきっかけになるかもしれない。

ニューモデル中層住宅

昭和 50 年代の初め、公団住宅は「高い・遠い・狭い」と非難を浴びていた。その人気を挽回しようと、一戸建てに負けないほど魅力的、という意気込みでニューモデルの中層住宅を企画した。切妻屋根で家らしい表情を持たせ、最上階・妻側・接地階それぞれに特色を出し、玄関まわりの中間領域や基本寸法、遮音性能など数々の改善を加えた。その第一号が横浜市青葉区に分譲され、私は特別住宅債券の優先枠で最上階の一戸を購入した。設備機器としては、ガス温水暖房システム（端末はファンコンベクターとドラム式の衣類乾燥機など）が導入されていた。

満足のゆく住み心地だった。その後、転勤でひとに貸した時期を経て再び住み、長期修繕計画に参加し、最後は管理組合の理事長も勤めた。入居から 16 年後、関西への転職のため中古物件として売り出すことになった時に問題が起きる。

リフォーム工事の一環として老朽化した給湯暖房機を 13 号からせめて 16 号へ交換しようと思った。しかし、FF（強制給排気）式のため、スリーブの径に制限があって大きく出来ないとのこと。やむなく同じ号数での交換となった。端末の劣化も否定できなかったが、そのままにした。設備機器の進化は早い。交換時の都合をもっと慎重に考える必要があったと悔やまれる。

熱帯の家と古材市場

昭和から平成に変わる頃、国際協力の任務で家族とともにインドネシアのジャカルタに暮らした。住んだ家は平屋の一戸建て。使用人達が住み込み、運転手が通って来るという体験はこの例だけである。建築には熱帯の暑さをしのぐための工夫がいろいろ見て取れた。

強烈な太陽の日差しを避けるため屋根の庇は大変深く、また屋根裏は換気を良くするため野地板は設けない。垂木に水平の瓦棧を取り付け、瓦を引っかけるように固定する。床は床下の空間を設けずに地面に直接作る。土間コンクリートの上に大理石が敷きつめられている。地中の温度は気温よりかなり低いので、室温が上がっても床はひんやりと感じる。飼い犬は最も涼しくなるポーズ、四肢を前後に伸ばし腹ばう姿で寝そべっていた。

ルームエアコンは部屋の広さに対して小さくあまり効かない。日本の「3LDK」がそのまま納まるくらいのリビング・ダイニングルームでは、天井扇の方が活躍する。熱帯の気候に慣れた我々の体は、もはや冷房を必要としなかった。

もうひとつ鮮烈に思い出すのは「古材市場」の情景だ。町はずれに建材屋が軒を連ねている地区がある。その一角に取り壊された建物から回収した建材だけを扱っている店が何軒もあった。瓦、テラゾーブロック、木製窓枠、ドア、手摺、衛生陶器など、ジャンル毎に分類され、手直しされて山積みされていた。価格は新品の3分の1程度だったと思う。

私はそれまで発注する工事の建材・部品は新品であることが当然と思い、中古を使うことなど念頭になかった。彼の地では安い人件費がそれを可能にしている、とは言うのは簡単だが、建材も使い捨てにせず使えるものは再利用する、という本来の姿を教えられた次第である。

30年を経過した住宅部品

関西へ転職するのを機に、築 27 年の一戸建て住宅を購入してエコ住宅に再生した。壁や窓の断熱性向上、健康的な建材の採用、自然エネルギー活用、雨水利用、屋上緑化などを実現した。建材についても廃棄物を減らすため使えるものは使いつづけ、副産物は再利用を試みた。住宅部品関連でもいくつか勉強になることがあった。

錠前：雨がかりのものは機能的に不具合があったが、内部のものは何ら支障がない。握り玉なのでレバーハンドルに比べると、少し使いにくいだけである。

アルミサッシ：枠と障子の変形はなく、ガラスも劣化は見られない。問題があるとすれば、車

輪の滑らかさとガスケットの縮み、それに気密性不足であった。気密性に関しては新たに設けたサッシで二重化したので問題解決。車輪を交換すれば、また 30 年は使えるだろう。

水栓：原始的で単純なものの方が耐久性に優れている。新たに設けた浄水器付きのシングルレバー混合水栓はわずか 3 年で閉まりにくくなった。直そうにも、どこから分解できるのかが分からない。新築当初からの 2 カランは、パッキンさえ交換すればまだまだ大丈夫である。

「スケルトン・インフィル」建築の概念では、躯体は 100 年、内装や部品は比較的短い時間で交換するものとされるが、住宅部品の中でも躯体に劣らず長持ちする部分と、交換すべき部分に分けて考えることができること、またそれを可能とする設計が必要なことを実感した。

建材や住宅部品の再生・再利用に取り組む時代が既に到来しているはずである。物量の販売・消費に依存する経営から、メンテナンスや居住サービスへ重心を移す動きに期待したい。

同時に、住まいの省エネルギーが建築的にも設備的にも最重要課題となって来た。地球温暖化や環境汚染を食い止めるには、省資源・省エネルギーが不可欠である。持続可能で循環型の社会を目指すならば、利便性・快適性などの向上は無限ではなく、将来の世代に迷惑をかけない範囲で許されるのではないだろうか。